

ひとり読みを主体とする学習過程の試み

Ⅱ 「川とノリオ」の実践よりⅡ

豊郷小学校 6年 上野 芳樹

I ひとり読みの復権

夏休みに一学期の実践記録をまとめるために、個人学習についての文献を少しばかり読んでみた。その中で、私がかかれたのは、次の二人の言葉である。

「教師の願いは、子ども一人ひとりが、その子なりに読む力を持つことである。もともと読むことは、究極においてひとり読みである。それは、自力の読みとも言えるし、主体的な読み、個性的な読みとも言えるであろう。」と今井鑑三氏は言われる。また、一読総合法の実践者である小松善之助氏も次のように言われている。

「読みはあくまで、自分の目で、自らの頭で読むものである。自分の歩幅にしたがい、自分の呼吸にあわせ、自分の心臓に聞いて立ち止まるものである。――読みは、もともとひとりのものである。」と。

二人とも実践の方法論は違っても、「読むことは、ひとり読みこそが本来の読みであり、ひとり読みの力を育てることが最も大事な仕事なのだ」という考えは一致している。これは、二人だけの主張ではなく、国語教育に携わる者だれしもが賛同すること考えだと思ふ。

ここ数年、私も文学教材を中心に個人学習の実践に取り組んできた。そして、個人学習の重要性をますます認識するようになってきている、だが、それは、あくまで一斉学習を前提としての意味を考えていたように思う。読みの追求というものは、一斉学習の場でみんなの力を集めて行うものであり、その追求に全員が参加できる力をもつために個人学習があるのだという捉え方をしていた。つまり、あくまで一斉学習を充実させるために個人学習がある、という考えだった。

しかし、個人学習に取り組んで、子どもたちひとりひとりがその子なりに自分の読みを生み出してくるようになるにつれ、安易に一斉学習につなげるよりも、個人学習そのものをもっともっと充実させるような学習過程を組んだ方が本当に「一人ひとりが生きる学習」になるのではないか、という思いを持ち始めた。

これまでのように一斉学習の準備としての位置付けではなく、もっと個人学習そのものの価値を前面におしだしてはどうか。個人学習↓一斉学習↓個人学習というように、個人学習のひとり読みを充実させるために一斉学習の場を持つという発想に立ってはどうかと思うようになった。

1学期に取り組んだ「川とノリオ」の学習は、そうした個人学習（ひとり読み）が学習過程全体の柱となるような学習活動を試みてみたいと思つてやったものである。

Ⅱ 「川とノリオ」 実践報告

1 指導計画

〔第1次〕	・ 教師朗読	音読練習	……………	……………	……………
	・ 全文通読	感想を書く	……………	……………	……………
				(1時間)	(2時間)

・感想交流 …………… (1時間)

〔第2次〕 ・章ごとに詳しく読む …………… (12時間)

〔第3次〕 ・学習のまとめの感想をかく…………… (1時間)

2 第1次の学習活動について

① 教師朗読

作品との出会いは大事にしたい。最初から子どもたちに自力で読ませていくのも一つの方法だが、かなりの長文だから、読む力の弱い子の中には読み通せない子も出てくるだろうと思ったし、やはり作品との最初の出会いはいいものになりたいと思って私が朗読した。これまでの戦争文学とちがいで、あらわな表現はないし作品全体が散文詩的な文章なので、子どもたちの反応はどうかと思ったが、思っていた以上によく集中して聴いていた。

② 全文通読・感想を書く

一読した後すぐ感想を書かせることはやめた。とても一読しただけでまとまった感想を書けるような物語ではないと判断したからである。だから、2時間かけて、音読練習をかねながら、全文をあら読みした。一人一文ずつ回し読みしながら、読めない漢字・意味を教え、この作品を読む上で基本的な事実を確認する作業を行った。(例えば、「8月6日」⇒原爆投下の日、新しいぼんちようちん⇒お母さんの死、など)

その上で、「初めの感想」を書かせた。たくさん書くことは無理に要求せず、書けるだけでいいからというこ

とで書かせた。子どもたちの感想は次の通りである。

「川とノリオ」 初めの感想

1 物語の内容についての感想

子どもたちの感想で最も多かったのが「ノリオはかわいそう」という、この物語の主人公ノリオについての感想だった。

川とノリオはかわいそうと思った。一番大事なあちゃんが死んだし、お父さんも死んだからかわいそう。

(菜穂子)

じいちゃんがノリオをそだてているで、としよりやのにそだててるでかわいそう。そしてふたりぐらしかわいそう。(浩生)

お父さんとお母さんがしんで、ノリオとじいちゃんだけでさびしそう。ノリオはかわいいそう。最後は、ノリオ一人だけで、さびしそう。おかあさんがいるときはたのしそうだったけど、じいちゃんとノリオだけになったらさびしそう。(勇也)

ノリオは二年生の時お母さんやお父さんと死に別れたのでかわいそうだと思います。お母さんがまだ生きていた時おしおきとかやられたのでよけいに悲しかったらうと思います。でも、草かりなどして気をまぎらわせていたのでお母さんかお父さんがいたらなあと思いました。(智子)

私は川とノリオを読んですごくかわいそうになりました。まだ小さいノリオをだいてお母さんがお父さんを見送って、お父さんはあとで小さなはこになってかえって来て、お母さんもいなくなつて、おじいさんの泣き方とか、悲しみをこらえているのを見るとともかわいそうと思う。川のはたにすすきとか、青いいぬふぐりとかも何か意味があるのかなと思つた。ノリオは川ばかり行くのは小さいころからのお母さんの思い出の場所だからと思う。(松宮弘子)

2 「川」についての感想

次に多かったのが、「川」に対する感想である。「川」が何を意味しているのか、はっきりつかめないながらも、この作品にとって「川」が重要な意味をもっていることは感じているようだ。

ノリオはお父さんやお母さんとはなれたけれど、川とノリオはいつもいっしょだなあと思つた。(青山亜紀子)

私は川はノリオのさびしいことや楽しいこともいつも見てきたと思います。そしてノリオも遊び相手はいつも川だったと思います。そしてお母さんが焼け死んだ時のノリオの悲しさはこの話にはそれほど書いてないけど川の様子などでノリオの気持ちがわかるころがありました。(藤谷明子)

この文章の全体を読むと、戦争でノリオは、お父さんもお母さんも亡くし、おじいさんだけで、かわいそうと思う。ノリオと川がいっしょに生活していたみたいと思う。川もノリオも友達みたい。(寛子)

初めは長すぎてわからなかったけれど、読んでいるとだんだんわかってきた。「川とノリオ」という題は主人公のノリオは、遊び相手がいないので川を見てると何だか戦場に行つたお父さんのような気がして入つていくと思う。それに、お母さんの「おしおき」も、楽しみにしていると思う。そんなに川とお父さんとお母さんが好きなんだと思う。(美希)

この話の題がなぜ「川とノリオ」かというところは、ノリオの気持ちを川があらわしているからだと思う。

(藤森真人)

かわいそう。じいちゃんは我が子がしんでいるのになみだながさん。こまかい文にいっぱいまつている。

川は歴史をつんでいる。(力)

私は、川とノリオを一通り読み終えて、川には気持ちがあるような気がした。やさしかったり、すましたり、こわかったりしてそう思った。

そして、ノリオはかわいそうだった。まだ小さいノリオはとっぜん母さんがしんでしまっただけでかわいそうだったその上お父さんも戦死したからかわいそう。

なぜ、この題が「川とノリオ」か。それはは、川とノリオは友達のようにで、何かがあると川の色がちがってみえたから、そう思った。

じいちゃんもかわいそう。もう年いってるのに、一人でノリオを育てなければならぬし、ノリオはまだ小さいのにいきなりお母さんが死んだと言えないから、心がすごく痛かったと思う。

それに、この川とノリオはすごくおおくが深い。例えば、「土くさい春のおいをかいだ。」でも何かありそうだった。(暢子)

3 文章について

数人であるが、この文章表現がこれまでの作品とずいぶん違うことに目をつけて感想を書いている子もいた。

ノリオはかわいそうだと思った。この人の書き方は、ズバリとはかいてないけど、しみじみ伝わってくる。

(丸野保)

短い文章(言葉など)の中にいっぱい思いが詰められている。この文章は、ノリオの気持ちが全部にまつている。(善崇)

こどもたちの感想は、次のようであった。

子どもたちの感想に対する考察

登場人物に対する感想が多かったのは、当然といえる。これまで物語の読みというのは、いつも主人公の気持ちによりそって読むことだったからである。だが、この「川とノリオ」はそういう読み方だけでは、読み切れないもつと広がりをもった作品だと思っている。ノリオ・その家族だけでなく、川を代表として描かれている様々な自然描写をも含めた文章全体をていねいに読み味わうことによって、この作品の世界がつかめるのだと考えている。だから、数は少ないが、2や3の感想を書いている子らの読みの方向を大事にして、読ませていきたいと思っただ。

③

感想交流

一人一人の感想を発表しあいながら、次のようなことを明らかにしたいと思ってやってみた。

・あらすじを確認する。

- ・感想が集中する場面、ことがらを明らかにする。
- ・これから詳しく読んでいくときの目のつけどころを明らかにする。

◎みんなの感想を内容的に整理してプリントにまとめ、それを読みながら発表・交流させていった。

- 1 物語の登場人物についての感想
- 2 川についての感想
- 3 表現についての感想

2 第2次の学習活動について

「ひとり読み」を学習活動の中心に置くという以上、どの子も言葉に触れて自分の読みを持ってなければならぬ。しかし、これまで何度か個人学習の経験を経ていくらかその力も育ってきているとはいえ、まだまだ自力で読める子は少ない。だから、この学習では、「一人読みの力を育てる」「どの子もが言葉に触れて自分の読みをつくる」ことを目標とする一斉学習を進めていくことにした。

実際にどんな学習になったのか、授業記録を通して報告したい。

① ごく素朴に言葉から感じたことを書く

基本的にはすなおに文章を読んで心に感じたことが「自分の読み」である。まずそういうものを書き付けるのだということを教えようとして次のような授業をした。

「川とノリオ」 1

◎どの子にも一人読みできる力を育てるために

◎まず、文の言葉から感じたことを自由に出し合い、書き込みの材料をどの子にも持たせる。

教材文

町外れに行く、いなかびたひと筋の流れだけれど、その川はずしい音をたてて、さらさらと休まず流れている。日の光のチロチロゆれる川底に、茶わんのかげらなどしずめたまま。

春にも夏にも、冬の日にも、ノリオはこの川の声を聞いた。

母ちゃんの生まれるもつと前、いや、じいちゃんの生まれるもつと前から、川はいつときの絶え間もなく、この音をひびかせてきたのだろう。山の中で聞くせせらぎのような、なつかしい、むかしながらの川の声を――

各自で読む

T はい、じゃ勇也読んでみて。

勇也 読む (まだたどたどしい)

T はい、もう一度みんな読んでみましょう。

C 読む

T 最初、ここを一人勉強で読んだときに、ここなんかええかんじやとか、線引つ張ったところありますか。

C ある

T そうか。じゃ、それをみんなで出しあいながら考えていきましょう。

力 「いなかびたひと筋の流れだけど、その川はすずしい音をたてて、さらさらと休まずながれている」そこ、なんかわからんけど、感じる。

勇也 先生、そこ、じょうずに読んでみて。

T 読む。

善崇 「チロチロ」でふつうとちよつと違う。

勇也 力君のゆうたところだな、なんか、ゆったりしている。

美希 「山の中で聞くせせらぎのようなつかしいせせらぎ」で、ゆったりしている感じ。

T はい、そういうふうには、ここ、ゆったりした感じがするとか、そういうふうに出して下さい。

美豊子 美希ちゃんと同じで、「山の中で……」でなんか、きれいな景色が浮かんでくる。

T いいねえ、きれいな感じがする。

幸則 「いなかびた」のところで、戦争とは思わせへんようなきれいな感じ。

T まるで戦争とは思えない、きれいで、のどかな。いいですね。

真人 「いつときも」で、水もかれんと。

裕幸 「日の光がチロチロゆれる川底に……」で、なんか、川がすきとおって、茶わんが見えている。

T うん、すきとおってきれいな川がうかぶ。

貞幸 「春にも夏にも……聞いた」ずっと前から、ノリオが生まれたときからながれている。

T ああ、いいこといったね。智美なんて言ったの。

智美 うんとな、生まれてからもなずつときいてる

T ノリオが生まれた時からずっと川と一緒にだということね。

智士 いや、ノリオが生まれるずっとずっと前から流れてるん。

T そう、川はずつとむかしから流れ続けているそうすると、その川が何か表しているという感じがしませんか。時間というか、歴史というか、

勇也 貞幸くんと同じところだな、「春にも夏にも」でな、なんか、仲良くしてる

T うん、いつも仲良し。

そうやって聞いていると、いっぱい出てくるでしょ。はい、志穂どう？

志穂 まあちゃんといっしょで、「この音をひびかせてきたのだろう」のところで、ノリオの小さい時も響かせていた。

明子 私も「春にも夏にも……」のところで、今までずっとゆったりときれいな感じで流れてきたと思う。

T はい、今聞いていると、これだけの言葉から様々なことが想像できるでしょ。今の話合いからもらっても

いいし、今聞きながら自分が思ったことでもいいですから、そこ書いて下さい。学習ノートに

C (一人読みを始める)

T (さつき子供たちが出していた意見を文を読みながら話してやる。)

T 書いていて、また違うこと浮かんできた人ある？美希だしてみて。

美希 「茶わんのかけらなどしずめたまま」のとき、やっぱ戦争やなあと思う。

T なんで？

美希 かけらとか見たら、お母さんがかわいそうになる

T はあ、かけて、われている、それがなんか戦争のイメージにつながる。おもしろいね。破壊されたもの。

C s 反対！きれいなもの。

善崇 茶わんに色があるやろ。ほんで、底できれいに光っている。

勇也 茶わんのかけらで思いついた。この茶わんのかけらはお父さんがつこてた。

和幸 茶わんのかけらで、よけい川がきれに見える

T よけいにきれいってどういうこと？

和幸 色がついて。

T ああ、キラキラと反射させたりね。

裕幸 すきとおってきれいなものもあるし、反射して光ってる。

力 ここ、いなかびた土地やろ。ほやさかい、山の中で聞くような川の音がするん。ほんで、いなかびたで、のどかやなと思うん。

T そうやね。のどかで

力 戦争中やのに。

裕幸 戦争ということを全く感じさせへん。

T 平和な、みんながあつたかくくらししてるみたいやね。いいんじゃないですか。そういうふうに書いておけばいい。

T はい、他に何か言いたいことある？

力 先生智子がなんか言いたいことがあるって。

T 言えや。

智子 さつき、よっちゃん、
「川底に茶わんのかけらなど……」で
きれいやていわつたやろ。あれ、なんか戦争中やできれに見えるんちがうかな。

T どういうこと？

智子 なんか、つらい毎日を送ってたら、なんか、ぱつと見たものがよけいきれいに見える。

T 今、智子がなんかおもしろいこといってるね。力、横で聞いてて、わかった？

力 ようあるやん。こういうこと。くろうなつてるとき、なんかちよつとしたことでも気がハツとするときあるやん。

T いいこと言うてるやん。

勇也 何！ちよつと待った。ストップ。もういつぺん

力 何かおちこんでる時があつてよ、まあ、ちよつとしたしようもないやつ見てもよ、心が落ちつく、ていうか、そういう感じのやつ。

T 自分がひどく悲しかったりするとき、何気ない花一輪がきれに見えるって、そういうこと言ってるんでしょ。わかるかな。

C s ああ。

T 戦争中ですぎすぎした世の中だから、こういうのどかな景色が、いつそうきれいに見える。そういうこともこれから読んでいくと面白いね。

② 文章への切り口のつけ方を教える。①

記録1でわかるように、ごく素朴に感じたことを出し合い、共感しあいながら、どんな言葉に目をつけ、どんなことを書いていけばよいのかを学ばせようとしている。だから、話し合いよりも書くことに時間をかけている。「読みつつ書く」「書きつつ読む」はこの学習全体の基本的な姿勢である。

ただし、ただ「何か感じたところを見つけなさい」というだけでは、限界がある。やはり文章へ切り口をどうつけるとよいか、ということをお教えてやる必要がある。そのことを意識してやったのが次の授業である。

「川とノリオ」2

◎幼いノリオの感情を五感からさぐる。

・ノリオが、目・耳・鼻・皮膚感覚でとらえている感覚を描いた文をてがかりにして、そこからノリオの気分・感情を想像してみる。

教材文

早春

あったかい母ちゃんのはんてんの中で、ノリオは川のおいをかいだ。
母ちゃんの手がせつせと動いた時に、はんてんのえりもともせわしく
ゆれて、ほったの上のなみだのあとに、川風がすうすうと冷たかった。
川つぶちの若いやなぎには、銀色の芽がもう大きかった。
赤んぼのノリオのよごれ物を洗う、あったかい母ちゃんの背中の中で、
ノリオは川のおいをかいだ。
土くさい、春のおいをかいだ。

T 今ノリオはいくつですかね。

C s 1才

C 1才もならない。

T まだ母ちゃんにおんぶしてもらってるんだからね。まだ、言葉もしゃべれない、歩けない。そういう時代ですね。ノリオは、自分の気持ちを言うことはできませんが
勇也 心で感じる

T うん、それは、どういうことで感じるかということにおいとかが、はだざわりとか、見たものとか、そういうものから、気持ちがいいなあとか、いやだなあとか、そういうことを感じるわけですね。

勇也 「あったかい母ちゃんの背中の中で、ノリオは川のおいをかいだ」

T そう、そこにもあるね。

智士 「ほっぺたの上のなみだのあとに、川風がすうすうと冷たかった」

T これもそうやな。 晃典まだほかにあるでしょ。

晃典 「土くさい春のにおいをかいだ」

T うん。これは、鼻で感じているんやね。

弘子 「はんてんのえりもともせわしくゆれて」

T ああ。これもそうだね。

今、はだざわり、におい、が出た。まだ他にないかな。

今、ここを読んでみると、ノリオが匂いとかはだざわりとか、そういうものを感じていることが書いてあるところがいっぱいありますね。そういうところに線を引っ張ってごらん。

例えばどんなところがある？保。

保 「あったかい母ちゃんのはんてんのなか」

T そう。これは、はだで感じていることですね。

智士 「ほっぺたの上のなみだのあとに、川風がすうすうと冷たかった」

T これもそうやな。 晃典まだほかにあるでしょ。

晃典 「土くさい春のにおいをかいだ」

T うん。これは、鼻で感じているんやね。

弘子 「はんてんのえりもともせわしくゆれて」

T ああ。これもそうだね。

今、はだざわり、におい、が出た。まだ他にないかな。

勇也 「川つぶちの若いやなぎには、銀色の芽がもう大きかった。」

力 色が出てきた

T そう、みていますね。目で。

勇也なんか、これ、ちっちゃいころお母さんにだかれてみてな、ちよつとでっこうなつてな、なんか、……

T そう、そういうにおいとか、はだざわりとかをノリオははどう感じているんだろうか、て考えて下さい。

例えば、「あったかい母ちゃんのはんてんの中」にいることをノリオはどう感じているかなあつて。いやだなあつて感じてるか、きもちいいなあて感じているか。

「銀色の芽」を気持ちわるいなあつて見てるか、たのしいなあつて見てるか、そういうことを書いて下さい

C (一人読み)

T はい、書けた人。かけらでもいいから出して。

それをヒントに他の人も考えられるから。

智子出して。

智子 「あったかい母ちゃんのはんてんの中」で、ノリオはまだ小さいので戦争ということは知らないで、毎日母ちゃんにだかれてうれしいと思う。それに「あったかい」と書いているのでノリオしか味わえない喜びがあると思う。

T うん。戦争も知らないで、あったかいぬくもりの 中にいる。

保 お父さんとちがうやわらかくつてあったかい感覚。

真ひと えつと、保君みたいには深く考えんと、なにかとてもうれしいと思ってる。

T うん。なにかわからんけど、とにかくうれしいだろう。とってもいい気分。あつたかさがうれしい。

晃典 どう？

晃典 まだ書いてへん。

T 今の聞いててどう。

晃典 うーん。保くんといっしょで、お父さんにはない、温かい背中。

T いいねえ。それをどう感じてる？気持ちがいい？

晃典 うん。

T 智美さんどうですか。

智美 真ひと君といっしょで、「母ちゃんの背中の中でノリオは川のおいたをかいだ」て書いたるやん。ほこで、ノリオは戦争とかしらんと母ちゃんの背中の中だけにいる。

力 ぼく、「川つぶちの……大きかった」のとこやで もう大きかったというのは、ノリオがもうちよつとちっちゃいときにもきたことがあって、（勇也ほのときはまだちっちゃかって）ほの時はまだ銀色とちよつとあつ銀色になってるといふ感じで、なんか思ってる

T 銀色の芽がきれいだなんて、うれしい。

裕幸 「あつたかいはんてんの中」でなノリオは戦争なんかしらんと、ただ、母ちゃんのはんてんの中がぬくといで、幸せそうにしている。

T 幸せという言葉はしらないけれどね。

弘子 「あつたかい」というところは、ノリオはお母さんはあつたかいなど感じて、ねむたくなるほど安心して

T

うん。いいじゃない。なんのおそれもないのね。

力 幸せというか。

T 留美はどうですか。今の聞いていて。

留美 私も松宮さんといっしょで、ノリオはあつたかいから、お母さんのはんてんがあつたかいから、気持ち良

T

うん。

じゃ、「つちくさい春のおいをかいだ」ここらへんから何か感じた人ある？

勇也 お母さんのおいはいいにおいやけんどな、土のおいとかはくさい。

T だから、いやなの？

お母さんのおいにくらべて、土のおいはいやだなと思う？ 亜紀子は どう思う？

亜紀子 ねむたくなっているときにお母さんのおいにまじって川のおいがしてきた、という感じ。

T だからどうなの、いやな感じ？

青山亜紀子 いやでもないんやけど、なんかへんなにおいやなという感じ。

真人 土くさい春のおいは、なんかお父さんのおいに似てる。

T なるほど、ほんで？

真人 いいなあ。

力 さつき幸則くんがいったみたいに、何にもおもわないんじゃなくて、何か感じてると思う。

和幸 「春のにおい」て書いてるで、もうすぐそこまで春が来ている。

裕幸 なあ、寒かったから寒さしか感じられんやん。ほやけど、もう寒うないでな、土のおいが鼻に入ってくる。

T ほう、おもしろいこといってるね。

ピンとこおりついでる冬には、においなんかしないやね。それが、寒さがゆるんできて、春が動きだし

てくると、いろんな花のおいだとか、土のおいととか、いろんなのおいがわきおこってくるね。
だから、ここは、いやなおいと読めるかもしれないけど、先生は、母ちゃんのあつたかいはんてんの中、そこに春の明るいにおいが入ってくる。なんか生きる命みたいなものが感じられる。
じゃあ、そこ、もう少し書いてごらん。

③ 文章への切り口のつけ方を教える②

|| 情景描写に目を向けて読む力を育てる ||

②で述べた「文章への切り口のつけ方を教える」ということの続きであるが、この「川とノリオ」は、情景描写の中にこそ読むべき内容がいっぱいつまっている。だから従来の「登場人物の行動を追う」ことよって読む、という姿勢だけではこの作品を深く味わうことができない。そのことをひとり読みにおいても意識してもらいたいと思って、一斉学習で意識的にやってみた。

◎母ちゃんの心情を情景描写の叙述とつなげて読む。

「川とノリオ」4

教材文

すすきはそれから川つぷちで、白くほほけた旗をふり、――母ちゃんとノリオは橋の上で、夕焼け空をながめていた。くれたけた町の上の広い広い空。母ちゃんの日に焼けた細い手が、きつくきつくノリオをだいていた。
ぬれたような母ちゃんの黒目に映って赤とんぼがすいすいとんでいった。川の上をどこまでも飛んでいった。

……前略……

保 この広い広い空のどこかにお父さんがいるんやなあと思って空を見ている。

T ああ、そうか。

勇也 ぼくちがう。「きつくきつく」もちよっとまじるけどな、夕焼けの空をながめていた、てな、お父さんがな、今いつてる顔を浮かべてな、ノリオをきつくきつく抱いてる。

T 浮かべて……悲しみが込み上げて来るの？

勇也 うん

T 広い広い空を見上げてみると、行ってしまったおとうちゃんの顔がうかんできて、悲しみが込み上げてくる。

暢子どう？

暢子 私は、「ぬれたようなかあちゃんの黒目」のところでな、思ったんやけどな、「きつくきつくノリオをだいた」のところだな、泣くのをがまんしたけどな、もうちょっと涙がでそうで少しぬれたけどな、小さいノリオを悲しませたくないでな、涙をおとすのをがまんしている。

T なるほど。がまんしきれずに涙がにじんでくる。それが「ぬれたような目」になるとうんやね。和幸 保君とよく似てるんやけど、広い広い空で、お母さんがノリオに、「この広い空の向こうの方にお父さんがいるんだよって、ノリオにいつてる。

裕幸 えっと、「広い広い空」は父ちゃんが遠くへ行ってしまったさびしさを現している。

T ほう、ちよつと違うのがでてきた。もういっぺんいつてごらん。

裕幸 今まで父ちゃんは母ちゃんらといっしょにくらしてたやん。ほやけど、もう遠くにいつてしまった。そういうさびしさを現している。

力・勇也 あつわかった。

T 今の大事なことやな。はい、勇也言つてごらん。

勇也 広い広いってな、なんか、よこにひろい、… ああ、なんかいえん。

T 今までは、「あの広い広い空のどこかに父ちゃんがいるんだ」て思つてがまんしようとしているという考えだけど、「広い広い空」でよけいにさびしくなるて言つてるんです。だれか、分かる人ないかな。

C ……

T じゃ残しておいて、他のところで。

哲郎、おまえ「夕焼け空」のところでおもしろいこと書いといたね。それ出して。

哲郎 父ちゃんがいつてしまつて悲しいのに夕焼け空 だけがきれいやで、くやしい。

T わかった？暢子

暢子 なんか、お父さんは行つてしまったのにな、夕焼け空だけが美しいでなんか、くやしい。

力 自分の気持ちは悲しい気持ちやのに、夕焼け空がきれいやでかなんといいか。くやしい。

T そう。自分が悲しいときにまわりが明るくてきれいだとよけい自分の悲しみが込み上げるといふことがあるでしょ。哲郎の読み方もおもしろいね。

そうすると、「くれかけた空」にもなんかない？大輔

大輔 「くれかけた空」て書いたるやろ。うすぐろうなつてくるやろ。ほういうところで、お母さんとノリオの暗いようなさみしい感じが出てる。

T 今の読み方も大事やね。

勇也 はい！ゆうたろ。「くれかけた」てくらいやん。お母さんとノリオにはさびしい気持ちになる。

T 今大輔と勇也がいつてることわかるもん、手上げてみ。どういふこといつてるの

C 何？

T 今、大輔と勇也は、「くれかけた町の上の広い広い空」で、それをお母さんがどう感じているかを出しているんだ。

智士 お母さんはな、また三人でいっしょにくらしたい。

裕幸 先生、父ちゃんが行つたのは昼か？

T それはわからないけどね。いまのこと。勇也、もういっぺん言つて。

勇也 「くれかけた空」て、暗いやん。ほんで、ノリオと母ちゃんはさびしいなつてる。

明子 くれかけた、いうのは、暗うなつてるんなでな母ちゃんは悲しいなつてる。

T だから「きつくきつく」とつながるんや。わかるかな？

力 うんつながる。

あの大ちゃんとかが、「くれかけた」で、うすぐろうなってかなしいなってるて言うたやん。ほやさかい、お母さんも悲しみをこらえてよ、一人でがんばっていいこうという感じになったんや。ほうい悲しみがなかったら、きつくだきしめんと、「さあ帰ろうか」となる。

T 美豊子わかる？これとこれ、つながるの。

美豊子 うんと、くれかけた空にお父さんは一人にいるんやさかいに、お父さんはいつかかえってきてくれるから、それまでがんばろう。

うん。……

先生の読み方言おうか。

「くれかけた町の上の広い広い空」これ、気持ちのいいものに見えますか。

Cs 見えへん。

T 見えないでしょ。うすぐらくなって、ぼうっと広がる空。そこに今ノリオと母ちゃんがぼつんという。勇也そこにお父さんの顔がうかんできて、がんばれよというてる。

T はげまされるような感じになるかな。

暢子 いや、もつと悲しいなる。

T うん、なんで？

暢子もう少ししたら、真っ暗になるんやろ。その中でぼつんというんやで。

力 その夕焼け空が今の自分の気持ちなん。

裕幸 心が暗くしずついでいく。

T いいか。これ、だいじやぞ。景色が書いてある。それがそのまま心をあらわしている。

父さんはいつてしまった。今自分のまわりには、ぼわっとひろがるからっぽの空。そこにたった時、さっきみんなが言ったような、「これからどうしてくらしていこうか。」とか「ノリオをどうやって育てていくか」とか悲しみがこみあげてくる。それできつつきつくだきしめる。

じゃ、もつと他のところで。さつき、幸則は、「白くほほけた」にもお母さんの心がある、て言うたね。それ、だして。

幸則 駅では人がいるし、お父さんの前ではさみしい顔見せたら、お父さんもさびしいなるで、笑顔を見せてたけど、人がいんようになったら、悲しみがこみあげて、心に風が吹いたような感じで、ぼうっとしている。

T で、それが「白くほほけたすすき」とどう関係あるの？

幸則 で、そういうふうにはぼうっとして。

力 これも気持ちやろ。はじめはふさふさゆれてたけど。

T これもお母さんの心を表しているのね。

じゃ、まだある？

力「赤とんぼがすいすい飛んで行った。川の上をどこまでも飛んでいった。」

なんか、お父さんが行ってしまおうというか、お母さんからお父さんがずっと遠ざかってしまおうような。

勇也 ああ、お父さんがどこまでもずっといってしまおう。

T 赤トンボがお父さんをあらわしている。

力 どんどんお母さんから引き離してしまおうような。

T ああ、そういう読み方ね。他の人どう？

真ひと えつとな、ああいうふう自由に自由になれたらいいなあと思ってるの。

T ああ。違うね。読み方が。もういっぺんいって。

真ひと ああいうふうに戦争とかなしにな、お父さんといっしょに自由に暮らしていけたらいいなあ、と思ってるん。

T それは、どの言葉から感じるの？

真ひと「すいすい」

T ねえ。まったくなんのこだわりもなしにすいすいとんで行く。そんなふうにくらしていけたらいいなあ

裕幸 ノリオのお母さんには、トンボが豊かにくらしているように見える。

T おもしろいね。がんじがらめのくらしから見れば自由にとんでいる赤トンボのくらしが

Cs 幸せそう。うらやましい。

T 逆に自分たちの悲しみがいつそう胸に迫ってくるね。

だから、力みたい読み方があってもいいし、これもいいね。

この授業では、やや強引に教え込もうとしているところがある。だが、そうして子供たちに読み方を教えておいたことはむだではなかった。後半の部分の読みとりに進むにつれて、子どもたちの方からどんどんそういう言葉に目をつけて読むようになってくれたからである。

例えば、「また秋」の章でこんな子どもの読みがあった。

「また秋」の章

智美 朗読

勇也 朗読

T 「こおろぎが昼間もリリリリと鳴いた」のところ。

裕幸 このときは、ノリオもじいちゃんも悲しいやろ。ほんで、こおろぎの鳴き声もかなしい。

T ほう、大事なこといったね。晃典わかった？

晃典……

保 こおろぎがないてる声が悲しい。

T ほれはなんで？ この声がすずしげなきれいな声に聞こえることだってあるわけでしょ。

裕幸もういっぺん言っつて。

裕幸 ここでは、じいちゃんはノリオの母ちゃんが死んでかなしいやん。読んてる方としてもかなしいなあと思ってるやん。そこで、また、父ちゃんが死んだやん。そこで、リリリて鳴いたら、ぼくら読んで悲しいと思ってるで、それも悲しいように聞こえる。

T そういうことね。今度はわかった？ 美豊子

美豊子 お母さんが死んだし、お父さんもかえってこうへんで、りりりりて、こおろぎもさびしく鳴いている。

力 この時は、お父さん死んだことわかってるの

T まだわかってへんね。

和幸 予告みたい。なんか、りりりりて悲しげに鳴いてるさかいに、もしかしたら、という感じで。

T いいでしょうね。

力 りりりりと鳴いた。やで、悲しい。

リンリンとかやったらな、明るい感じがするやん、だけど、リリリリ、ていうたら、なんか、すずしい、ていうか、ぞくぞくするような。

T 力の言うてるのわかるね。リンリンというと明るい晴れやかなひびきだけど、リリリリという細い、寂しげな響き。それが、今のノリオの家の状況と響きあっているわけですね。父ちゃんも母ちゃんもない、がらんとしたノリオの家とリリリリという寂しげな声とがひびきあっている。

④ ひとり読みと話し合いをセットにして1時間の学習を構成する。

前半で、読み方の基本的なことを一斉学習の場で教えたので、後半はもう自由にひとり読みさせていった。

1時間の前半10分〜15分をひとり読みの時間にあて、残りをみんなでの話し合い、という個人学習と一斉学習をセットにした形で1時間の授業を展開させていった。

その一例を次の授業記録で見てもらいたい。

教材文

冬

こおりつくようななまり色の川。川つぶちを走る空っ風が、ひびにしみる。
電線はヒューンと泣いているが、ノリオの家のあひるっ子は元気だぞ。
ノリオの家の白い二羽のあひるは、川の中で泳ぎの競争だ。
なまり色の中の生きた二点。
じいちゃんは工場へ通っている。弁当を持って、毎日、空っ風の中を。

各自で朗読

力 朗読

T これだけにしぼって勉強します。今まで川とノリオを勉強してきた時に、景色からノリオたちの心だとか気分を読むことができる。それから、色からやはりそういうことが読める。それから、川があらわしているもの。それから、音・はだざわり、そういうものからノリオたちの心を読む。そういう勉強をしてきました。そういう目でここを読むといっぱいそういうものが見つかると思います。これから10分間、自由に書き込みをしていただきます。

たとえば、例をあげれば、「冬」で題から何かを感じる。春でもなくって夏でもなくって冬。

力 寒い

T そう、その寒さは何を表しているのだろう。

和幸 ノリオの心の中

T そういうふうだね。

「なまり色の川」。きらきら輝く川ではなく、しかもこおりついたような川。それは何を表しているか。そういうふう読んでいくといい。

個人学習

(何人が寄ってやっている者もいる。)

T じゃ、先生が読みますから出して下さい

「冬」。はい、この題から何か感じた人

真ひと 春ではなくて、悲しい季節。

力 冬やでな、何か悲しそう。

裕幸 冬やと、何かぱっとしいひん。

力 誰かの気持ちを表してるみたい。

T 誰の？

力 ノリオとかじいちゃんの。

T ノリオやじいちゃんの気持ちをうつしている。

どうですか。

真人 こわい

T じゃ、つぎ「こおりつくようななまり色の川」

貞幸 川はな、もうノリオと遊べないように、死んだみたい

亜紀子 あったかい母ちゃんが死んでな、氷りつくようなノリオの心のような

浩生 寒くてこわい。

智士 さびしい

真人 川といっしょにこおりつく。

T そういうこおりつくような気分がノリオの心だ。

和幸 なんか、重々しい。なまり色やる。ほんで、ノリオやじいちゃんの心も重い。

T なまり色。色だけじゃなくて重さもある。ずしんと重い。

勇也 なんか、よけいつめたそう。ふつうではつめたいんやけどな、よけいつめたそう。

T うん。和美さんどう。

和美 前の方は山の中で聞くせせらぎのような川だったのに、冬になって、……

力 なんかさびしそう。

T 前の山の中のせせらぎのような川と比べて、春のきらきらがやくような川と比べて、どう、川は何を表している？

力 やっぱりノリオの心。

T 心とか姿。母ちゃんに見守られて金色に輝いていた時代から冬の時代へ移ってきている。そういうふうにも読めるでしょ。

「川つぶちを走る空っ風がひびにしみる。」

大輔 そこでな、前にノリオの父ちゃんとかが死んだから ノリオの悲しみがある。

真人 ノリオの体の中は、風がひゅーひゅー風が通っていてつめたい。

T 空っ風というのかわいたつめたい風やね。それはけしきだけでも、なにか、さびしい、ガラーンとしたノリオの心をふいていく風のように感じる。

力 ひびにしみる。て、その風がノリオの心につきささる、ていうか。

T うん、そうね。

「電線はヒューンと泣いているが、ノリオの家のあひるっ子は元気だぞ。」

晃典 ノリオの家のあひるっ子は、ノリオとおじいさんで、元気だぞ、ていうのは自分らも元気だぞ、ていうこと。

T ああ、いいね。

智美 あひるっ子は、ノリオとおじいさんといっしょで、お父さんとかが死んで悲しいと思っているけど、

ノリオのあひるは元気に遊んでいる。

哲郎 晃典君といっしょで、ノリオの家のあひるっ子は元気だぞ、て、前のことはわすれて、元気だしてる

T いいこといってるね。前の悲しいことはふりきって、元気ががんばってる。

裕幸 「こおりつくようななまり色の川」とかな、今まで暗かったやん。それが、ノリオとおじいさんの心を表して、ノリオの家ではな、あひるだけが元気なん。

T ノリオは暗いの？

力 いや、ノリオは明るいと思うで。

T どう、あひるっ子は何を表していると思う？

C ノリオとじいちゃん。

裕幸 あんな、「泣いているが」て書いてるのは、それをがまんして、元気だぞ、て、始めは悲しかったけど、もうそんなことは忘れて今はもう元気にくらしているぞて、いうこと。

勇也 ぼくといっしょ。

T おもしろいね。いいんじゃないですか。